

「生命にしがみついて」 人はなぜ重荷を背負って生きるのか？

芳川 敏博（京都府城陽市）

はじめに

「この真理こそは、永遠に残らん・・・人々は生き、のたうちまわれり。それだけの勝負にも得るところはあろう、皮袋に入れた金が失われようとも」

以上のような四行詩から始まる「生命にしがみついて」『*Love of Life*』(1905)¹⁾ は、人生をゲームにたとえ、人生の偶然性や厳しさを暗示している。同時にジャック・ロンドンは、人生には金以上のものがあり、金を失っても生きる価値があるということも示唆している。

極北の地で、ある男が一人置き去りにされ、死と隣り合わせの極限状態で寒さや飢え、熊、狼などと生死をかけて闘うこの作品は、ロンドンの短編集の中でも「焚き火」『*To Build a Fire*』(1908)の次によく知られている作品である。ロシア革命の指導者レーニンも晩年病床で愛読した。ロンドンの作品にはいつも、いろいろな技法が用いられ、自分自身の人生観が象徴的に暗示されている。

「人はなぜ生きるのか」は永遠の課題である。「ただ何となく」「死ぬのが恐ろしいから」「生かされているから生きなければならぬ」などと、生きる目的を否定的に漠然と考えている人々も多い。ロンドンはこの疑問に対してどのように考えていたのか、また、どのような技法を用いて読者の心に訴えようとしていたの

かを、以下に考察する。

逆説の発想

飯嶋良太は「生命にしがみついて」の作品論の中で、ロンドンの技法を次のように述べている。「ロンドンが生きることを肯定し、死を嫌悪しながらも、生きることの喜びを描いていないことだ。ここに彼の演出法の特徴がある。生を美化するのではなく、反対に崖っぷちに追いつめ、生に対するアンチテーゼと闘わせることで生を描くのだ」「ロンドンが意図したのは、その主題が物語と読者との間に介入してくるのではなく、物語をしてそれを語らしめることだった」²⁾

「生命にしがみついて」は、題名が示すように「生命にたいするあくなき執着」を主題としている。しかし、物語の大半は死の恐怖と死と直結する自然との闘いを描写している。物語の最後に少しだけ、男が捕鯨船に助けられ十分な食事を与えられたとある。これは、『白牙』の中で大半がいろいろな敵との闘いを描き、最後のほうで少しだけスコットとの安からな生活を描いているのと同様である。光の部分を強調するために、逆に闇の部分を丁寧に描いているのである。死を強調することによって、生きることの大切さを、より強く訴えているのではないか。

男とビルの運命の分かれ道

男とビルは極北の地で偶然に片足を痛み、さらに偶然に男は足首をくじいて歩行が困難になった。この偶然とそれに対してどのように考え、どのような行動をとるのが、生死を分けることに

なった。人生はまさに偶然の連続の結果であり、人間の選択肢はそれほど多くない。自然の掟や人間社会の掟に反する行動をとると、死の恐怖が待ち受けている。

男は最後まで物語の中で名前や年齢などが明らかになっていない。つまり不特定多数の人間で善人を象徴している。ビルという名前は「紙幣;お金」を意味する *bill* を連想させ³⁾、少数の悪人を象徴している。(『野性の呼び声』のバックが「1ドル;お金」を意味する *buck* と関連している⁴⁾のと同様である)この作品は、人間の可能性を信じて、楽観主義的な観点から書かれている。

人間は極限状態になると、本性が現れる。男は理性が欲望に勝って生き延びたが、ビルは理性が欲望に負けて死ぬことになってしまった。

男がほとんど歩けない状態になってしまったのに、ビルは男をつめたく突き放している。その様子は次のように述べられている。

ビルは、乳白色の水の中をそのままよろよろと歩きつづける。
見まわしたりしない。後ろの男は、ビルが行くのをじっと見ている。その顔は相変わらず無表情だけれど、目のほうは傷を負った鹿の目に似ていた。(p.117)

人間の特徴である直立歩行が不可能になった状態で、男は生死をかけた闘いを一人でしなければならなくなった。男は極端な空腹状態であったが、理性を働かせて持っていた全ての金を捨ててしまった。以下がその記述である。

昼頃には、荷物が重くのしかかるようになってきた。もう一度金を分け、今度はその半分を単に地面にこぼしただけだった。午後には、残りの半分も捨ててしまい、残ったものといえば毛布半分と、ブリキのバケツと、ライフル銃だけであった。(p.134)

ついに、男には毛布やライフル銃、ナイフもなくなり、マッチが半分しか残っていない。足は醜い生肉のかたまりと化けている。このように死が近づいている極限状態でも、男は理性的に行動している。その記述は以下の通りである。

男は、落ち着いていて冷静だった。・・・やることは何でも理性のみによった。ズボンのすそを膝まで裂き、足に巻きつける。・・・これから船までの恐ろしい旅になりそうなことをやりだす前に、少し湯を飲んでおこう。(p.141)

ビルは理性が欲望に負けており、金が入っている皮袋を手放さなかった。代償に狼の餌食になってしまった様子を、次のように述べられている。

しゃぶり取られたばかりの骨が数本あって、その水苔には多くの狼の足跡がついていた。自分のと対になったずんぐりとした大鹿の皮袋を見たが、鋭い歯で引き裂かれていた。(p.143)

「人はなぜ重荷を背負って生きるのか？」という疑問

ロンドンは「私にとって人生とは何か」「**What Life Means to Me**」(1916)⁵⁾というエッセイの中で、人生について次のように述べている。「私は人間が食欲よりも価値があり程度の進んだものに発達するとき、今日の刺激、すなわち胃の刺激以上に人間を行動に駆り立てるもっとすばらしい刺激が生まれてくる時がくるのを楽しみにしている。私は、人間の気高さと卓越した点に対する自分の信念を忘れないでいる。優しい気持ちと無私が、今日のひどい暴食に打ち勝つことを信じている」

物語の最後には、科学者たちは男がひそかに堅パンを用意して、また起こるかも知れない飢饉の予防策を講じているのを目撃している。そして、その癖はなおるだろうと科学者は言っており、サンフランシスコに到着するころには事実、回復した。ついにロンドンは、最後まで明確に「なぜ人は重荷を背負って生きるのか？」という疑問に表面的には答えていない。しかし、ロンドンは心の中でその男と読者に、「衣食住だけでは人間にとって十分でない。苦しい経験を生かして、積極的により人間らしい生活を目指してほしい」と強烈なメッセージを送っているのだろう。

“ We don't live to eat; we eat to live. ”(人は食べるために生きるのではなく、生きるために食べるのである)なのである。欲望よりも理性をさらに働かせること、そして、人と人との思いやりや、心温まる対話をもっとも大切にすべきだということを象徴的に述べているのではないか。

阪神淡路大震災から約10年が経過した。その石碑に次のようなことが書かれている。「震災で失ったものは、命、お金、仕事、家族の団らん、そして、震災で得たものは、思いやりと人と人と

のつながりである」どん底の生活を乗り越えた人のみが、生きることの本当の喜びを知る可能性が高いのである。

(注)

- 1) 本稿はジャック・ロンドン作、辻井栄滋訳『極北の地にて』(新潮社、1996)の「生命にしがみついて」に基づいている。
- 2) 大浦暁生監修、ジャック・ロンドン研究会編『ジャック・ロンドン』(三友社、1996)の「狼と虫の闘い・・・いのちへの愛」飯嶋良太、pp.103-104 と p.114.
- 3) 大浦暁生監修、ジャック・ロンドン研究会編『ジャック・ロンドン』(三友社、1996)の「狼と虫の闘い・・・いのちへの愛」飯嶋良太、p.105.
- 4) 日本ジャック・ロンドン協会 *Essays on Jack London and His Works Vol.2, 2003*, 『野性の呼び声』特集の「犬・狼の視点と比喻表現からみる人間研究」芳川敏博、p.45.
- 5) 立命館経済学第52巻第5号、2003, J・ロンドンの思想的根幹を成すエッセイ三篇、辻井栄滋訳、「私にとって人生とは何か」p.170.